

## 第2節 離婚に対する意識

### 1. 離婚に対する意識の実態

#### (1) 離婚に対する考え(Q4、Q6)

##### ① 離婚に対する考えの全体的傾向

「今の世の中、離婚はよくあることである」、「離婚して幸せになれるのなら、離婚してもいい」という意見には8割以上の回答者が、また「離婚は人生の再出発である」、「離婚することで、人間的に成長する」という意見には約7割の回答者が賛成していた。9割以上の回答者が、離婚が「人生の敗北」となることはないし、「離婚は、恥ずかしいこと」ではないと感じていた。また、離婚によって、「社会的信用を失う」、「同情をされる」、「交際範囲が狭くなる」とも考えられていなかった。離婚は「人生の再出発」、「人間的に成長する」という離婚がもつ積極的な意味も認識されており、全体的に離婚に対して好意的な意見がもたれていた。なお、離婚増加の背景要因として、約7割の回答者が、「女性が経済力を身につけたので」、「女性が自立したので」と、女性の経済的自立を挙げていた。

しかし、「(もし自分が結婚するとしたら)離婚だけは、どんなことがあっても避けたい」と6割強の回答者が回答しており、自分が離婚することに対しては、忌避感がもたれていた。また、6割以上の回答者が、「離婚家庭は経済的に苦しい」、「離婚家庭の親は、ひとりで両親の役割をにない苦勞している」、「離婚すると女性のほうが、男性よりも苦勞する」と、離婚にともなう苦勞を察していた。

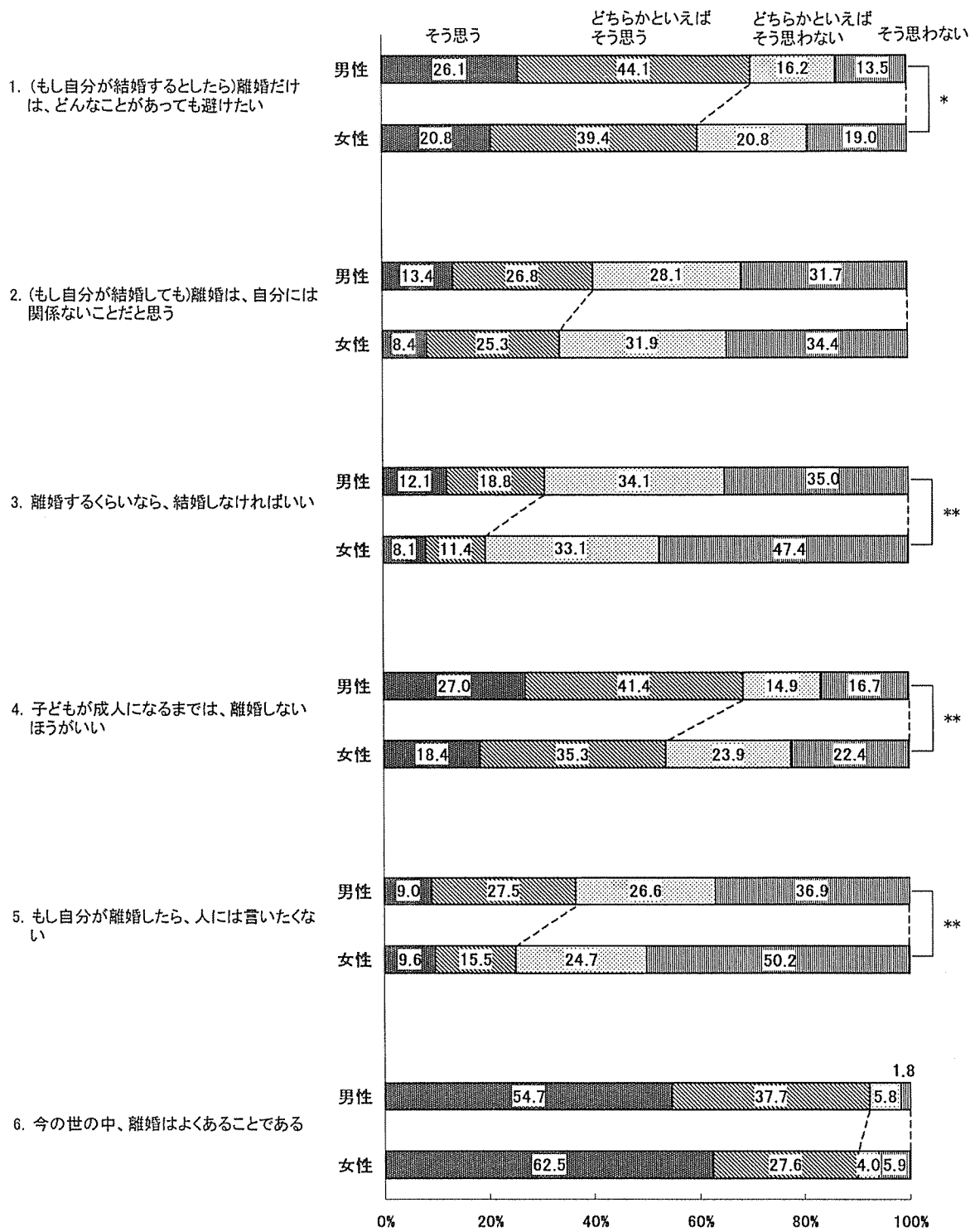
離婚への賛否は、離婚にともなう子どもへの負担のかかり方によっても異なっていた。8割の回答者が、「子どもに両親の絶え間ない喧嘩を見せるより、離婚したほうがよい」という意見に賛成しており、結婚を継続することが、かえって子どもに多くの負担をかけるのであれば離婚した方がよいと考えられていた。一方、「子どもが成人するまでは、離婚しない方がいい」と考える回答者も6割いた。子どもの成長には両親が必要であり、いずれかが欠けるために、子どもの成長に負担をかけるのであれば、離婚しない方がよいと考えられていた。

全体として、離婚によるプラスの側面も認識されており、一般論としては離婚に対して許容的な態度がもたれているものの、自分自身がさまざまな苦勞がともなう離婚することに対しては、忌避感が持たれていた。また、離婚への賛成するか否かは、子どもにかかる負担によって異なっていた。

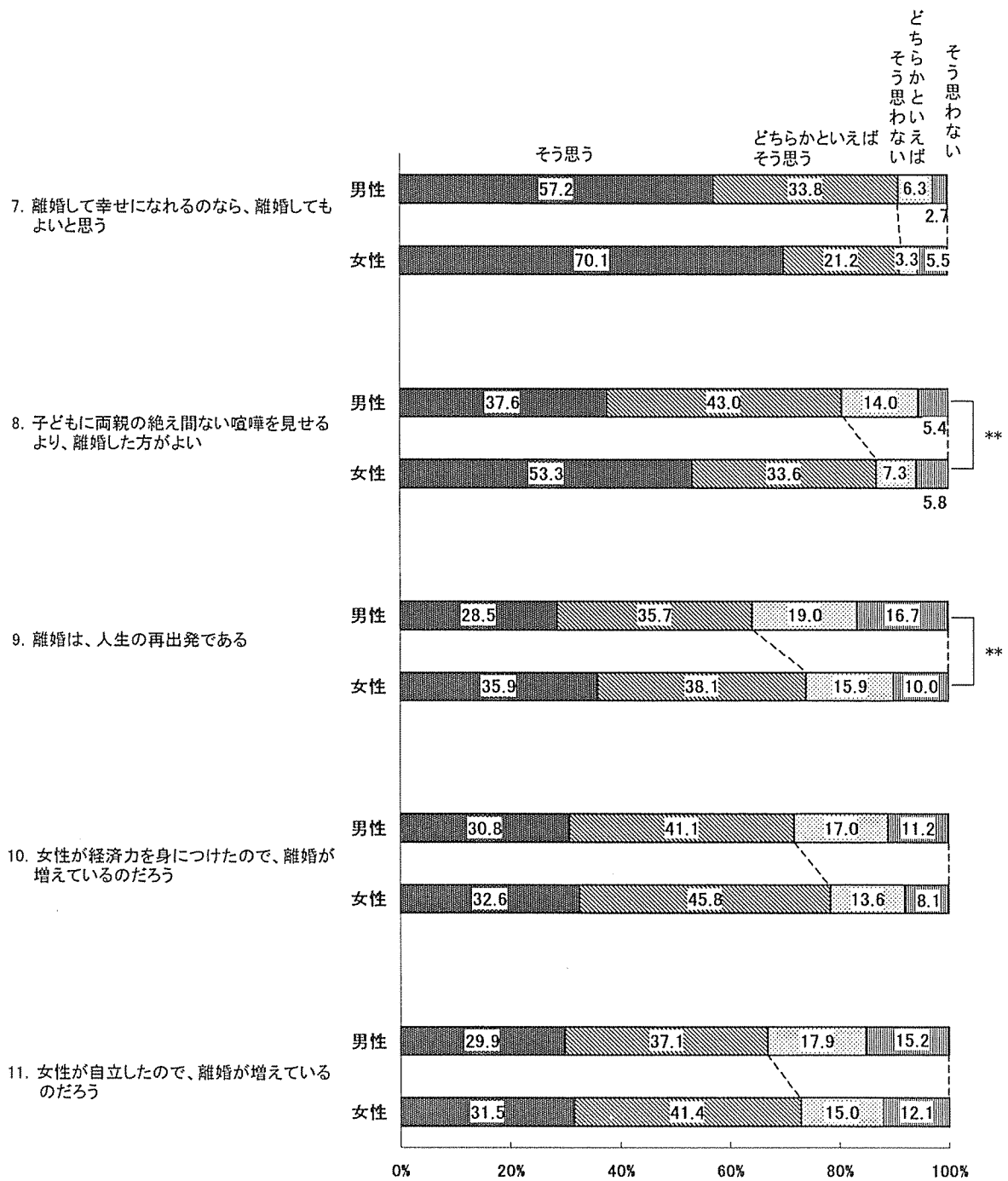
##### ② 離婚に対する考えにおける性差

男女別にみた各質問項目に対する回答結果を、図表 2.16 (Q4) と図表 2.17 (Q6) に示す。

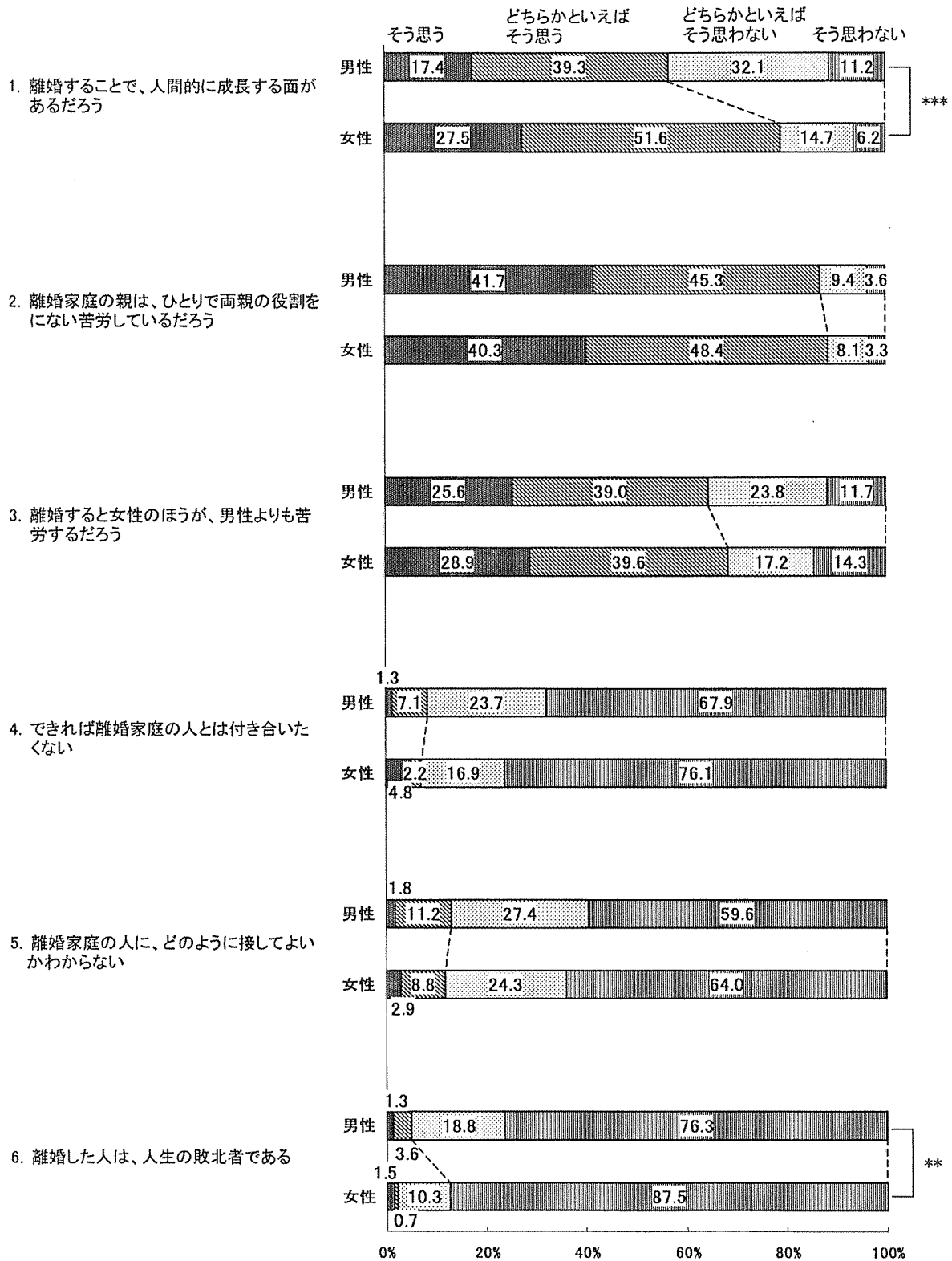
図表 2.16a 男女別にみた離婚に対する考え(Q4)



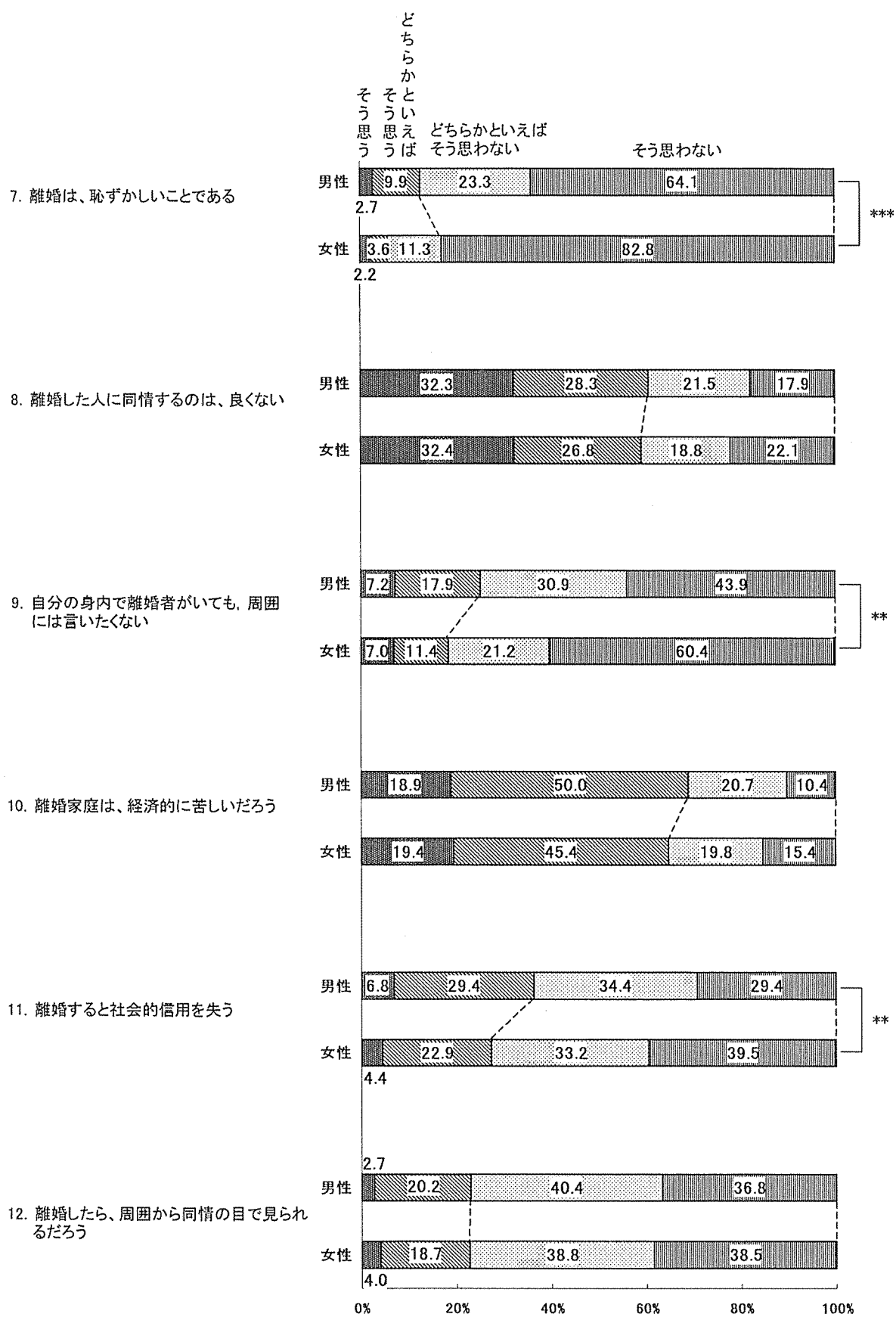
図表 2.16b 男女別にみた離婚に対する考え(Q4)(続き)



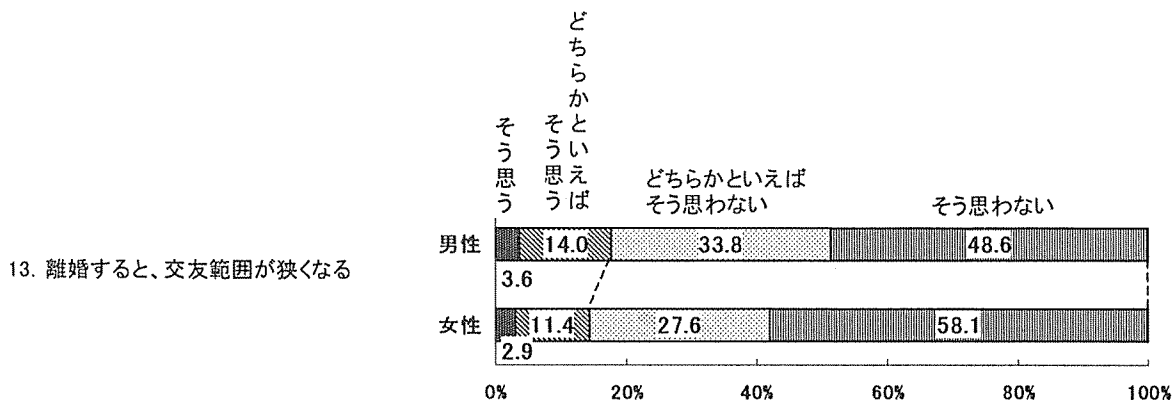
図表 2.17a 男女別にみた離婚に対する考え(Q6)



図表 2.17b 男女別にみた離婚に対する考え(Q6) (続き)



図表 2.17c 男女別にみた離婚に対する考え(Q6)(続き)



男性は女性よりも、「(もし自分が結婚するとしたら)離婚は、どんなことがあっても避けたい」、「離婚するぐらいなら、結婚しなければいい」、「子どもが成人になるまでは、離婚しない方がいい」、「もし自分が離婚したら、人には言いたくない」、「離婚した人は、人生の敗北者である」、「離婚は恥ずかしいことである」、「自分の身内で離婚者がいても、周囲には言いたくない」、「離婚すると社会的信用を失う」という意見に賛成する傾向が強かった。一方、女性は男性よりも、「子どもに両親の絶え間ない喧嘩を見せるより、離婚したほうがよい」、「離婚は、人生の再出発である」、「離婚することで、人間的に成長する面があるだろう」という意見に賛成していた。

以上に見られるように、男性は、女性に比べると、離婚に対する忌避感や抵抗感が強く、離婚によって世間体や体面が傷つくと考えていた。一方、女性は、男性よりも、離婚は人生の再出発であり、人間的に成長させるものとしてとらえており、また、子どもに喧嘩を見せるのであれば離婚した方がよいと考えており、離婚に対して許容的な態度を持っていた。

## (2) 離婚する原因に対する考え(Q5)

### ① 離婚する原因に対する考えの全体的傾向

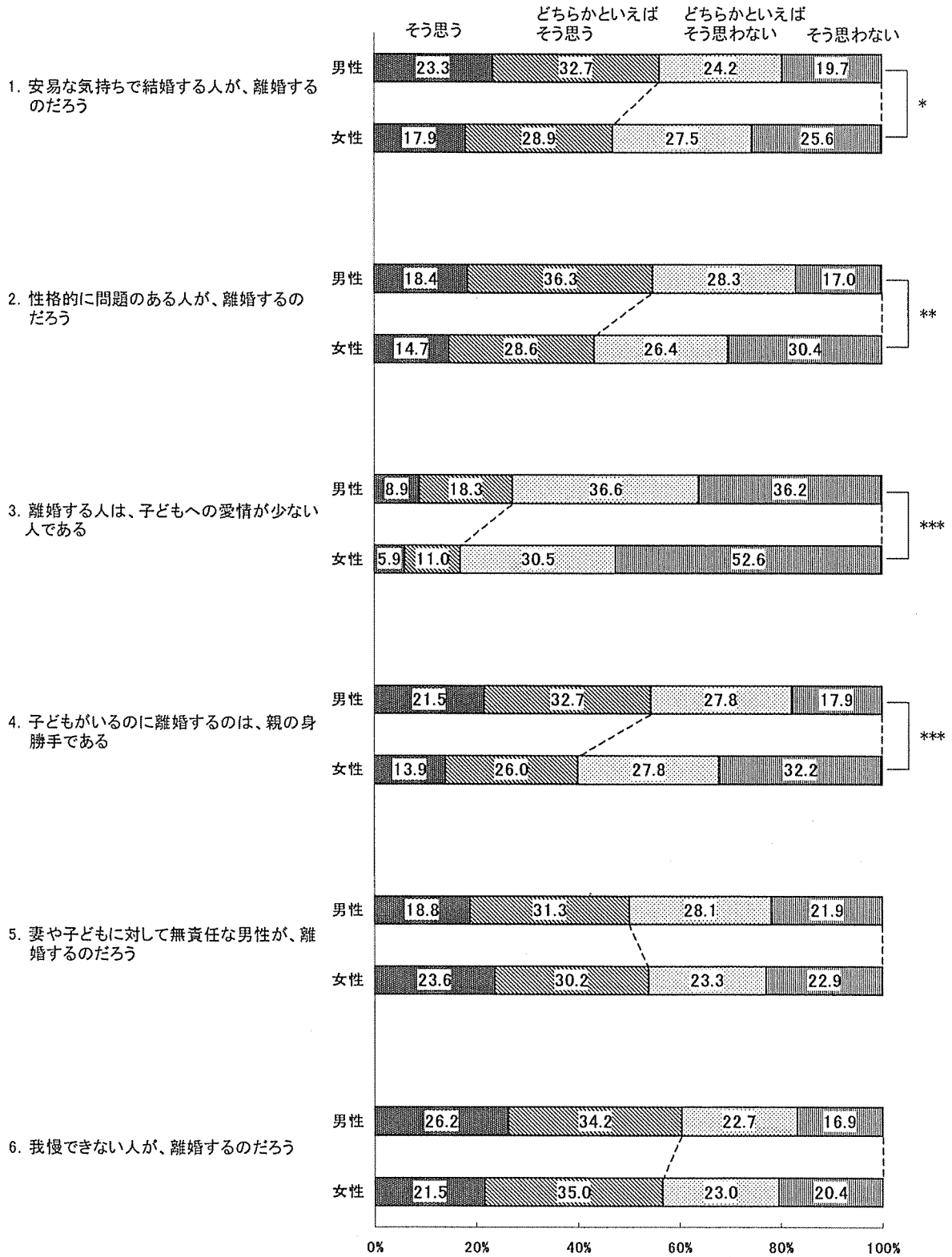
「離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である」との意見には、8割の回答者が反対していた。一方、約半数の回答者は、「子どもがいるのに離婚するのは、親の身勝手である」と捉えていた。また、離婚する人は、「安易な気持ちで結婚する人」、「性格的に問題のある人」、「妻や子どもに対して無責任な男性」、「我慢できない人」と考えられていた。

全体として、離婚することと、子どもへの愛情とは別問題としてとらえられており、個人としての親のあり方も許容されていることが窺える。しかし、離婚した人は、妻や子どもに対して無責任である、我慢できない人であるなど、離婚の原因が離婚者の性格の問題や、安易に結婚を決めた軽率さに帰属されており、離婚に対するネガティブなステレオタイプも存在していた。

② 離婚する原因に対する考えにおける性差

男女別にみた離婚の原因に対する考えの回答結果を図表 2.18 に示す。

図表 2.18 男女別にみた離婚の原因に対する考え (Q5)



男性は女性よりも、「安易な気持ちで結婚する人が、離婚するのだろう」、「性格的に問題のある人が、離婚するのだろう」、「離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である」、「子どもがいるのに離婚するのは、親の身勝手である」と考えている傾向が強かった。男性は女性よりも、離婚の原因は、本人の性格的な問題や軽率な結婚理由、親としての無自覚さにあると認識していた。

### (3) 離婚家庭の子どもに対する考え(Q7)

#### ① 離婚家庭の子どもに対する考えの全体的傾向

離婚家庭の子どもは、「非行化しやすい」、「学校で問題を起こしやすい」という考えには、7割前後の回答者が反対していた。また「離婚家庭は、不良仲間のたまり場になりやすい」という意見には、7割強の人が否定していた。一方、9割弱の回答者が、「子どもには両親がそろっていることが必要である」と考え、8割の回答者が、「離婚すると、子どもにストレスがかかる」と回答していた。全体として、離婚が子どもの反社会的行動を確実に促すとはとらえられていなかった。しかし、子どもには両親が必要であると考えられており、片方の親が欠けることによって子どもにかかる負担が懸念されていた。

#### ② 離婚家庭の子どもに対する考えにおける性差

男女別にみた離婚家庭の子どもに対する考えの回答結果を、図表 2.19 に示す。

図表 2.19a 男女別にみた離婚家庭の子どもに対する考え(Q7)

